

日本語の教科書の「ストレートな表現」

趙南星*

chons@hanbat.ac.kr

船橋瑞貴**

funahashi@gunma-u.ac.jp

＜目次＞

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 3. 研究目的及び「ストレートな表現」の規定 |
| 2. 先行研究 | 4. 調査方法 |
| 2.1 第5～7次教科書における誤用及び不自然な表現の分析 | 4.1 資料とする教科書 |
| 2.2 2009改定教科書を対象とした研究 | 4.2 調査手順 |
| 2.3 2009改定教育課程の教科書に見られる不自然な表現 | 5. 調査結果 |
| | 6. おわりに |

主題語: 日本語の教科書(Japanese Language textbook)、ストレートな表現(straight expression)、2009改定教育課程(2009 revised curriculum)、高等学校 日本語 I(high school Japanese I)、高等学校 日本語 II (high school Japanese II)

1. はじめに

本稿では、2009改定教育課程の教科書(高等学校『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』、以下、2009改訂教科書)に見られる「ストレートな表現」を分析する。本稿では、コミュニケーション上、問題となる日本語学習者による日本語使用を、誤用、不自然な表現、「ストレートな表現」と区別する。本稿における誤用とは、音声・音韻、表記・文字、形態(活用)、語彙、表現における「正誤」の問題であり、いわゆる「文法的に誤りである」と判断されるものである。それに対して不自然な表現とは、文の構造や文と文のつながりに関わるものであり、「文法的に誤りである」とは判断できないものの、文脈上、適当ではないと判断されるものである。そして、「ストレートな表現」とは、不自然な表現の中でも、特に、過度に断定的である表

* ハンバット大学 日本語科 教授

** 群馬大学 国際センター 専任講師

現、あるいは、直接的であるため不適切と感じられる表現を指す。本稿が「ストレートな表現」とラベル付けし、不自然な表現から取り立てて着目するのは、一般的に、韓国語母語話者が日本語母語話者に比して、より直接的に、明確に発話する傾向があるとされるからである。日本語を用いてコミュニケーションを図る場合、「ストレートな表現」は相手を直接的、間接的に刺激し、違和感を与えるものであり、刺激を和らげるために何らかのコミュニケーション上の配慮が必要となる。「ストレートな表現」は、相手を刺激するものであるため、文法的な誤りである誤用や不自然な表現以上に、コミュニケーションに支障をきたす場合も少なくない。

教科書を作成する際には、当然のことながら、自然な日本語使用を取り入れることが目指されるが、文法の難易度に基づく教育的配慮から、特定の表現使用を避け教科書作成を行うことがあると推測される。特に、初級段階のコミュニケーション重視の教育現場においては、「自然な日本語でなくても意味が通じればよい」といった姿勢もまま見受けられるが、本稿としては、これは指導上の段階的な問題、つまり、教え方に関わる問題であって、教える内容である教科書の記述に該当するものではないと考える。教科書においては、誤用は言うまでもないが、不自然な表現や「ストレートな表現」に十分留意した記述が求められる。

これまで、第5、6、7次教育課程の教科書(以下、第5~7次教科)を対象として、誤用や、本稿でいうところの「ストレートな表現」も含む不自然な表現に関して多くの研究がなされてきた¹⁾。本稿では、第5~7次教科書と同様に、自然な日本語使用を念頭に編まれた教科書である2009改定教科書を対象とする。当該教科書を対象とする多様な研究が進められているものの、不自然な表現、中でも、「ストレートな表現」に関する研究はまだ行われていないのが現状である²⁾。

2. 先行研究

ここでは、高等学校日本語教科書に関する研究をまとめる。2.1において、第5~7次教科書の誤用及び不自然な表現を分析した研究を整理する。2.2において、2009改定教科書を対象とした研究を概観する。

1) 2.1 参照。

2) 2.2 参照。

2.1 第5～7次教科書における誤用及び不自然な表現の分析

趙(1995)は、第5次教育課程の『日本語(上)』(4種類)と『日本語(下)』(4種類)の8種類で語彙、文法、表現上の誤用を分析している。趙(2001a)は、第6次教育課程の『日本語Ⅰ』(12種類)と『日本語Ⅱ』(12種類)の計24種類で語彙の誤用を、趙(2001b)は、同24種類の教科書における文法の誤用を分析している。不自然な表現の分析としては、趙・目黒(1999)が語用論上の誤り³⁾を分析しており、関(2003)は、無作為に選んだ3種類を対象とし、談話分析の観点から不自然な対話文(表現)を分類し分析している。また、趙(2005a)では、第7次教育課程の『日本語Ⅰ』(12種類)と『日本語Ⅱ』(4種類)の計16種類にみられる不自然な表現が分析されている。そして、趙(2005b)では、同課程の教科書における「へのだ」の提示及び誤用について報告されている。

2.2 2009改定教科書を対象とした研究

2009改定教科書を対象とした研究には、文化的側面から内容や語彙を分析する研究、対話文の状況について調査・分析する研究、学習内容及びカリキュラムの繋がりを論じるもの、学習内容を掘り下げ、文法項目とその提示方法に着目するものがある。以下に概観する。

まず、文化的側面から内容や語彙を分析するものには、奈呉・李(2015)、金(2015、2016)がある。奈呉・李(2015)は、7種類の教科書における対話文で、日本文化がどのように提示されているかを分析している。金(2015)は、『日本語Ⅰ』(7種類)の「文化紹介欄」に文化的内容がどのように取り上げられているか、多様な文化素材の編成は適切であるかを論じている。金(2016)は、『日本語Ⅰ』(7種類)の「文化紹介欄」において、文化内容を説明する際に文化関連語彙がどれぐらい提示されているか、そして、具体的にどのような語彙があるか、また、どのように表記されているかを調べている。

次に、対話文の状況に着目する研究としては、渡邊・尹(2015)と박(2015)がある。渡邊・尹(2015)は、『日本語Ⅰ』(7種類)の対話文において、どのようなコミュニケーション機能が取り上げられているかを調査・分析している。박(2015)は、『日本語Ⅰ』(6種類)の対話文(863文)を6

3) 趙・目黒(1999: 57)は、「語用上の誤りとは、文法的には正しくとも、使用場面や使用者に合わず、コミュニケーション上問題となる。つまり理解できなかったり、不快に感じたり、不自然と感じられるような用例である。」と述べている。

つの要素(対話者の関係、場所、時間、主題、機能、参与者)から分類し、分析している。

そして、学習内容とカリキュラムに着目する李(2014)は、『日本語Ⅰ』(7種類)と『日本語Ⅱ』(3種類)を対象として、両者の繋がりを横と縦の観点から分析している。李(2015)では、文法教育について考察するために、『日本語Ⅰ』(7種類)と『日本語Ⅱ』(3種類)における文法項目の提出順序及び提示の仕方が調べられている。

2.3 2009改定教育課程の教科書に見られる不自然な表現

ここでは、2009改定教育課程の教科書に見られる不自然な表現について述べる。

2.3.1 語彙に関わる不自然な表現

おんがくしつはとしよしつのうえです。

<B-I、p.75>

この一文が自然な日本語使用となる状況は、例えば、校内の案内図等を見ながら「おんがくしつ」の位置に言及する状況、あるいは、「としよしつ」にいて「おんがくしつ」の位置に言及する状況⁴⁾等、限定的な状況ではないだろうか。いずれにしても、「うえ」の提示文としては改善の余地があると考ええる。

A バスを おりる まえに おかねを だすんだよ。

B うん、わかった。

<E-II、p.83>

バスに乗る際ではなく、バスを降りる際にお金を支払うというバスのシステムに関するやりとりであるが、その状況では、「おかねをだすんだよ」ではなく、、「お金を払うんだよ」等がより適切であろう。

4) その状況では、例えば「おんがくしつはこのうえです。」という発話が想起される。

2.3.2 文法(文型)に関わる不自然な表現

ナリ : 私は 外国人ですが、日本では、子どもの日には 何を しますか。
 こたえ : 子どもの日には こいのぼりを 上げます。それから、かしわもちを 食べます。
 ナリ : どうも ありがとうございます。

<A-I、p.86>

外国人のナリが、日本の行事について質問することからはじまるやりとりである。

まず、1点目の問題は、「～んです」の不使用である。このやりとりの状況は、外国人であるがゆえに日本の行事について知識がないという背景を前提として述べることで、日本の行事について質問することの妥当性を高め、質問をスムーズに開始したい状況である。そのような状況においては、「私は外国人ですが、」と事実を叙述する形式ではなく、「私は外国人なんですが、」と「～んです」を用いて、前提として示すのが適当であろう。

2点目の問題は、行事の性格と「それから」の多義に関連する問題である。子どもの日は、決まった流れがあり、それに沿って事が運ぶような性格の行事ではない。そのため、このやりとりの状況は、子どもの日に、一般的に行うことを列挙している状況と考えられる。そのような状況においては、累加の意味の他、継起的な意味でもよく用いられる「それから」を使用すると、継起的な意味にも解釈可能になり不自然さが生じてしまう。そのため、例えば「子どもの日にはこいのぼりを上げたり、かしわもちを食べたりします。」といった、列挙していることを明確にできる文型を用いるのがより適当であると考ええる。

スジ：少し 鼻水も 出るんです。
 医者：風邪ですね。薬を 出しますから、ゆっくり 休んで ください。
 それから 今日は お風呂に 入らない 方が いいですよ。
 スジ：はい、わかりました。ありがとうございました。

<D-II、p.110>

患者のスジが病状を訴え、医者が病状に応じた指示を出すというやりとりである。この状況は、「今日はお風呂に入らない方がいいですよ。」というアドバイス(提案)といった、「お風呂に入る」選択の余地を残す表現ではなく、例えば「今日はお風呂に入らないでくださいね。」というように、誤解のないように明確な指示を出すべき状況であると考えられる。本例は、終助詞を用いる等して柔らかい印象を添えるにしても、言語形式としては意図を明示でき、直接

的に伝わる文型を使うべき状況である。教科書においては、このような例は少なく、逆に、直接的な表現により不自然さを感じさせる例が多く見られる。以下、その詳細を見ていく。

3. 研究目的及び「ストレートな表現」の規定

2.1でみたように、第5～7次教科書を対象とした誤用や不自然な表現に関する研究は複数なされている。一方、2.2で概観したように、2009改定教科書を対象とする研究は複数あるものの、誤用や不自然な表現、「ストレートな表現」に着目した研究はまだなされていないのが現状である。そこで本稿では、コミュニケーション上、問題となる日本語使用の中でも「ストレートな表現」を、最新の版である2009改定教科書を資料として論じることとする。前述したように、「ストレートな表現」とは、過度に断定的である表現、あるいは、直接的であるため不適切と感じられる表現である。以下、趙(1995、1999、2005)において正誤の問題ではない、つまり、誤用ではなく、不自然さを伴うもの(不自然な表現)として言及される例の中から、「ストレートな表現」を取り上げ具体的にみることで、本稿で扱う「ストレートな表現」を定める。

(1) 第5次教育課程

先生、今日も日本語の作文の試験がありますか。

いいえ、作文はしばらくやめて今日からラジオのニュースを聞かせることにしました。

(→聞)

<C-下、p.12>

(趙1995：199)

(2) 第6次教育課程

<地下鉄で(席を譲る)>

スチャル : おじいさん、どうぞ。

(→無し)

おじいさん：どうも すみませんね。

<A- I、p.26>

(趙1999：72)

A：あした、バスケットの試合があるんですが、あなたも参加しませんか。

B：あしたはちょっと困ります。あさってだったら参加できますが。

(→ちょっと…)

<C-II、p.117>

(趙, 1999 : 65)

(3) 第7次教育課程

金：山田さん、ちょっと入ってもいいですか。

山田：はい、どうぞ。

金：あのう、日本のすもうについて知りたいですが、どうしたらいいでしょうか。

山田：インターネットで 調べた方が いいと 思います。

(→調べたらいいと思います / 調べたらいいと思いますよ)

<J-I、p.144>

(趙2005a : 371)

4. 調査方法

4.1 資料とする教科書

分析の資料とする教科書は、2009改定教科書10種類(『日本語I』7種類と『日本語II』3種類)である。教科書の詳細は、<表1>の通りである。以下、各教科書は略名で表記する。

<表1> 分析対象の教科書

略名	出版社名	教科書名	単元数
A-I	(株) 教学社 [교학사]	高等学校 日本語 I	10課
B-I	キルボ(길벗)	高等学校 日本語 I	10課
C-I	(株) 多楽園 [다락원]	高等学校 日本語 I	10課
D-I	(株) ミレエン [미래엔]	高等学校 日本語 I	10課
D-II		高等学校 日本語II	10課
E-I	(株) 時事日本語社 [시사일본어사]	高等学校 日本語 I	12課
E-II		高等学校 日本語II	10課
F-I	エデュースウル [에듀서울]	高等学校 日本語 I	10課
G-I	天才教育 [천재교육]	高等学校 日本語 I	10課
G-II		高等学校 日本語II	8課

4.2 調査手順

<表1>にあげる教科書から、「ストレートな表現」を抽出し、そのように判断される理由について記述した。そして、日本語を母語とする日本語教師(2名)に、その記述が妥当であるかどうかについて意見を求めた。その結果、2名が「妥当だ」と判断したものを分析対象とする。

5. 調査結果

2009改定教科書では、以下のような「ストレートな表現」がみられた。これらの日本語使用は、断定的で、直接的である不自然な表現であり、相手を直接的・間接的に刺激する可能性のある表現であるため、何らかの配慮が必要だと思われる。

(1)

A：わたしが 日本語を おしえて あげるよ。

B：あ、ありがとう。

<E-II、p.35>

(2)

こんにちは。テニス部です。テニスを した ことが ありますか。

いいえ、でも 楽しそうですね。

いっしょに やりましょう。おしえてあげますよ。

え? おしえてくれるんですか。やってみようかな。

<E-II、p.34>

(1)は発話状況の詳細が不明だが、Aの「おしえてあげるよ。」に一種の押しつけがましさも感じられるやりとりとなっている。この「～てあげるよ。」が自然な表現となるには、その前提として、「日本語を習いたい、教えてほしい」というBの強い欲求がなくてはならない。その前提が不明な(存在しない)状況で「～てあげるよ。」を用いるのは、Bを感情的に刺激する発話になる可能性がある。それに対して、(2)の部活勧誘という状況では、「楽しそ

うですね。」という発話で、テニスに対する欲求とはいかないまでも、少なくとも興味は示されているので、「いっしょにやりましょう。おしえてあげますよ。」における「おしえてあげますよ。」が(1)に比して容認できる発話になっているだろう⁵⁾。「～てあげる」は、相手が明確に望んでいることを、手助け的に行うという状況において使用可能な表現であり、そのような条件が揃わない状況では、一種の押しつけがましさといった感情的に刺激する表現になるので注意が必要である。

(3)

ジフくんのおべんとうは何?
 おすだよ。食べても いいよ。
 おいしい。ぼくの やくにくも どうぞ。

<E- I、p.162>

「～てもいいよ。」は、何らかの欲求に対し、それを許可する意の表現である。よって、「食べてもいいよ。」の前提には、相手の「食べたい」という欲求がなくてはならない。このやりとりは、「おべんとうは何」か、そのメニューを聞いているだけであり、「ジフくんのおべんとう」を食べたいという欲求が示されていない状況である。確かではない相手の欲求を推し量る発話は、相手の心情を害する恐れがある。本状況では、例えば「食べてみる?」「味見する?」といったように、相手の気持ちを確認するワンクッションが必要であろう。

(4)

じゅぎょう中、うるさくて すみませんでした。
 でも、先生の じゅぎょうは おもしろかったです。
 さとうけんじ

<E- I、p.201>

先生に感謝のメッセージを書くという状況である。感謝の意を伝えたいという意図でのメッセージであることは理解できるものの、目上の人を評価する意を含む表現は失礼にあたるため、相手の感情を害する恐れがある。

5) 容認度があがるとはいえ、例えば「教えますよ。」がより適当であるとする余地もあるだろう。

(5)

りえちゃん、おこのみやき、作る こと、できる？

うん、作れるよ。

じゃ、作り方を 教えて くない？

うん、いつが いい？

あしたの 午後は どう？

うん、いいよ。

たのしみだね。

<C- I、p.174>

「おこのみやき」の作り方を教えてほしいとの頼みに応じるやりとりである。頼まれた「りえちゃん」は、「うん、いいよ。」と応じたのに対し、頼んだ方は「たのしみだね。」と反応している。「りえちゃん」が自ら、「おこのみやき」の作り方を教えることを望んでいた状況ではないので、「たのしみだね。」と「だね」を用いて「りえちゃん」の感情を先回りするかの発話は、失礼な印象を与える恐れがある。例えば、頼んだ方が「ありがとう、たのしみ!」と発話したのに対して、「りえちゃん」が「たのしみだね。」といったやりとりならば、「だね」の使用も容認度が上がると思われる。

(6)

セリさん!

ぼく、こんどの どのようひに「まけないぞう」をつくる ボランティアに いきます。

「まけないぞう」は じしんの ひがいに あった 人たちの しごとづくりになる ボランティアです。

よかったら いっしょに いきませんか。

へんじ おねがいします。

<G- II、p.129>

携帯メールでボランティア活動に誘う状況である。「よかったらいっしょにいきませんか。」とあるように、もし興味があつたり、都合があれば参加しませんか、と誘うメールである。そのような状況で「へんじおねがいします。」と返事の要求をするのは、少々直接的な、強い印象を与える可能性がある。一般的に、携帯メールはPCメールよりも即時的な返信を期待できるツールとして認識されるものである。このような、相手が比較的早くメー

ルチェックをしてくれるという前提があるツールにおいて返事の要求が適当となるのは、例えば、事が重大であることから返事を要するとき、返事を急いでいるときや期日があるとき等の特別な状況であろう。本状況には、そのような重大性、緊急性がないことから、直接的で、強い印象を与える恐れがある表現となっている。

(7)

あのう、すみません。 ぼくには できる ボランティアが ありますか。
この ボランティアは どうですか。公園をそうじしたり、道を 案内したり します。
いいですね。いつから する ことが できますか。
来月からです。
じゃ、ぼく、します。

<A- I、p.127>

ボランティア活動の問い合わせに応じている状況である。ボランティアをしてもらうか否かの最終判断は、ボランティア提供側にある。そのため自ら、「じゃ、ぼく、します」という断定的な意志表示をすることは、直接的な印象に繋がる。直接的に自分の意志を表明するのではなく、ボランティア提供側に最終判断を下す余地を残した発話、例えば「じゃ、ぼく、したいです。」や「じゃ、ぼく、してもいいですか。」等を用いるのがより適当であろう。

6. おわりに

本稿では2009改定教科書(『日本語Ⅰ』(7種類)と『日本語Ⅱ(3種類)』)における「ストレートな表現」を調べた。先行研究、すなわち、第5～7次教科書で確認したような「ストレートな表現」が、2009改定教科書にも少なからず見られた。

このような「ストレートな表現」は、相手に違和感を与え、見えない不快感や誤解を招く恐れがあるものである。受動的、婉曲的な表現を使用する日本語母語話者と比べ、相対的に能動的、直接的な表現を好む韓国語母語話者においては、日本語によるコミュニケーションにおいて「ストレートな表現」を用いやすいこと、また、「ストレートな表現」の問題に自ら注意を払うことは難しいことが推測される。

「教科書のような日本語ではなく、実際の、生きた日本語を教えてください」といった声は、現在も少なからず聞かれるものではないか。また、言うまでもなく、教科書で提示される日本語が、実際のコミュニケーションにおいて支障をきたすものであってはならない。教科書の作成において、限りある紙面に教えるべき学習項目の全てを取り込み、適切に記述することは至難のわざかもしれない。そうではあるが、適切な、より自然な日本語使用の提示という指針のもと、教科書作成には絶え間ない努力が求められる。本稿で分析した「ストレートな表現」は、いわゆる誤用のように明確な正誤判断がつく性質のものではないが、上記の教科書作成の指針には、必要不可欠な視点の一つであると考える。

今後は、現行の教材にも「ストレートな表現」が見られるかどうかを報告したい。

【参考文献】

- 金世連(2016)「문화소개란의 문화관련 어휘 분석(文化紹介欄の文化関連の語彙分析)」『日語日文学』69、大韓日語日文学会、pp.115-140
- _____(2015)「『高等学校 日本語』教科書の 文化的 内容 分析(『高等学校 日本語』教科書の 文化的 内容の分析)」『日語日文学』65、大韓日語日文学会、pp.87-109
- 奈呉真理・李暉洙(2015)「高校教科書『日本語 I』における日本文化」『日本文化研究』54、東亜細亜日本学会、pp.89-112
- 渡邊美知子・尹岡丘(2015)「2009改定教育課程の『日本語 I』における意思疎通機能の分析：対話文の場面、状況を中心に」『日本語教育』72、韓国日本語教育学会、pp.1-12
- 박정원(2015)「고등학교 일본어 교과서의 대화문 상황요소 분석(高等学校の日本語教科書の対話文の状況要素の分析)」『日本語教育研究』33、韓国日語教育学会、pp.77-96
- 李尚秀(2015)「2009改定教育課程における高等学校の日本語の文法教育：文法項目の提出順序之仕方を中心に」『日本語教育』71、韓国日本語教育学会、pp.1-15
- _____(2014)「2009改定教育課程における高等学校の日本語教育の繋がり」『東北亞文化研究』41、東北亜細亜文化学会、pp.241-257
- 趙南星(2005a)「고등학교 일본어 교과서의 부자연스러운 표현(高校の日本語教科書に見られる不自然な表現)」『日語日文学研究』第53輯、韓国日語日文学会、pp.349-373
- _____(2005b)「고등학교 일본어 교과서의 「의だ」 오용에 대하여(高校の日本語教科書に見られる「のだ」の誤用について)」『東北亞文化研究』第8輯、東北亜細亜文化学会、pp.173-191
- 関恒雄(2003)「韓国の高校日本語教科書における問題点(不自然な会話文)の分析：談話分析の観点による」『日本言語研究』第3輯、日本言語文化学会、pp.151-171
- 趙南星(2001a)「고등학교 일본어 교과서의 어휘 오용(高校の日本語教科書に見られる語彙の誤用)」『日本文化学報』第10輯、韓国日本文化学会、pp.121-138
- _____(2001b)「고등학교 일본어 교과서의 문법 오용(高校の日本語教科書に見られる文法の誤用)」『日語日文学』15、大韓日語日文学会、pp.9-27
- 趙南星・目黒秋子(1999)「韓国高校教科書における語用上の誤りの分析と評価」『東アジア日本語教育・日本文化研究』1、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、pp.57-75

趙南星(1995)「韓国の高校の日本語教科書に見られる誤りの分析と評価」『大田産業大学論文集』12-2C、大田産業大学校、pp.183-200

논문투고일 : 2018년 09월 30일
심사개시일 : 2018년 10월 17일
1차 수정일 : 2018년 11월 06일
2차 수정일 : 2018년 11월 13일
게재확정일 : 2018년 11월 19일

 <要旨>

日本語の教科書の「ストレートな表現」

趙南星・松橋瑞貴

本稿では、コミュニケーション上で問題となる日本語学習者による日本語使用を、誤用、不自然な表現、「ストレートな表現」と区別し、2009改定教科書10種における「ストレートな表現」を調べた。本稿でいう誤用とは、「正誤」の問題であり、いわゆる「文法的に誤りである」と判断されるもの、不自然な表現とは、「文法的に誤りである」とは判断できないものの、文脈上、適当ではないと判断されるものである。そして、「ストレートな表現」とは、不自然な表現の中でも、特に、過度に断定的、あるいは直接的であるため、不適切と感じられる表現である。調査の結果、「ストレートな表現」が、2009改定教科書にも少なからず見られた。「ストレートな表現」は、いわゆる誤用のように明確な正誤判断がつく性質のものではないが、受動的、婉曲的な表現を使用する日本語母語話者と比べ、相対的に能動的、直接的な表現を好む韓国語母語話者においては、日本語によるコミュニケーションにおいて「ストレートな表現」を用いやすいこと、また、「ストレートな表現」の問題に自ら注意を払うことは難しいことを指摘した。「ストレートな表現」は相手を直接的、間接的に刺激するものであるため、誤用や不自然な表現以上に、コミュニケーションに支障をきたす場合も少なくないことから、教授、教科書作成において注意が必要な表現形態であることを述べた。

Straight Expressions in Japanese Language textbooks

Cho, Nam-Sung · Funahashi, Mizuki

This text separates the problems of communication of a Japanese learner in error, awkward expressions, and straight expressions, and researched 10 types of straight expressions in 10 textbooks revised in 2009. The error in this text means problem in correctness, which eventually means grammatical error, and awkward expression means error that is not grammatically wrong but contextually inappropriate. And straight expression means expressions that are inappropriate because it is overly conclusive or direct among the awkward expressions.

According to the research, there were many straight expressions in textbooks revised in 2009. Straight expressions do not have clear standard like actual errors, but comparing fluent Japanese speaker who uses passive and indirect expressions with fluent Korean speaker who uses active and direct expressions, it was addressed that it is easier for Koreans to use straight expressions and be aware of the problem while communicating in Japanese. Because straight expressions affect the other in a direct and indirect way that cause actual problems in communication other than errors and awkward expressions, the text tells how professors and textbooks should be careful with using those expressions.